

池田魯參著 『摩訶止觀研究序説』

山内舜雄

『摩訶止觀』はどのように読むのがいいのか、という原初的な問いを、まず著者は提出する。

かくいう筆者も、大学院で『摩訶止觀』を講ずることかれこれ二十年に亘るが、これはむづかしい問題である。

時間をたっぷりかけて『弘決』から読んでゆくのなら話しは別だが、ことに本学のように、禪宗的視点に立って読むばあいは、それほど時間をかけるわけにはゆかぬ。しかし、正軌には読みたい、という要請はつよい。

この要請に応えるべく著者は、六祖荊溪湛然の『止觀義例』二巻と、『止觀大意』一卷をとり上げる。

これは、いささかオーソドックスな、一見古風な手法のようにみえる。そのように指導した覚えが、筆者にもある。しかし、従来のそれと違うところは、湛然教学にあらたな照明を当てていることである。

湛然の解釈学を前提にすえて見る時、従来の研究にみられる不備な点や偏向していた点を、正しく把握することができであろうし、そうすることによって初めて『摩訶止觀』の厳密な解釈理解

が可能になるのではないか、(『同書』はしがき)との確信のもとに、第一章で『止觀義例』の解釈学を、第二章で、『止觀大意』の解題法を究明する。第三章においては、禪仏教においてみた『摩訶止觀』の諸課題について論究する。

その意味では、たしかに題名のごとく『摩訶止觀研究序説』というにふさわしい。

読者は、本書によって、まことに取っつきにくい『摩訶止觀』への通路を、けっして容易ではないが、見出すことができるであろう。

ところで湛然教学の評価は、なかなかむづかしい。彼は、華嚴の澄観がむしろ禪宗寄りになったのとは対照的に、禪宗批判を積極的に展開する。そして天台止觀の独自性を高調する。

のちの趙宋天台の代表者四明知礼も、この湛然の教学の影響を承けて、華嚴ともども禪宗を斥けている。

このような湛然・知礼の、天台側からの禪宗批判の基調が奈辺にあるかを充分承知のうえで、著者は論をすすめる。

まず、第一章の始めで、湛然教学の再評価をこころみ、『摩訶止

観輔行伝弘決』冒頭の文を出して、湛然が、『摩訶止観』の祖釈研究に思い至った、十種の意図を吟味する。これは適切な施設といえる。いまその詳細に亘る余裕はないが、その撰述理由を、「禅宗や華嚴学から発せられた天台批判に対して、それに応える形で行われていた事実はみのがしてはならぬ」(同上)ないとして、「いわば、天台止観の存在理由そのものが問われ、危機にひんしていた時代の中で、湛然は自己の求道をかけて、天台止観のあるべき解釈学を探索し構築した」(同上)とする。

従来、湛然の『弘決』は、『摩訶止観』という祖文に対する祖釈として、絶対的地位を天台教学からは与えられている。が、ただ漠然とその権威が認められているだけで、著者のように湛然の解釈学を上記のごとく尅実したものではない。

このようにして把握された「画期的な湛然教学を先ず大前提にすえて」以下の論述がこころみられる。

たしかに、かかる研究方法は、著者のいうごとく禅宗や華嚴宗との接点を明らかにし、「天台止観の禅仏教における位層を測定する」のに役立つであろう。

その意味では、洞門にとって利点多き『摩訶止観』の入門書といふことができる。

『摩訶止観』をどう読むかは、客観的な問題だが、この問題を「強く自覚した最初の人は湛然であった」(同上)というのなら、禅仏教からの『止観』の読み方もまた存するわけで、著者は、絶えずこの点を意識しつつ、できるだけ客観的に理論的に湛然の解釈学を分析し、その再構成をはかる。

第一章の内容をすこしく吟味してみると、まず「義例」の字義を

釈したのち、『止観義例』のように、解釈方法のみを問題として論じた著述は、天台教理史だけのことではなく、内外の仏教典籍に探ってみても、「(同上)一四頁」その比をみない独目のものであるとして、以下の七例を出して、詳しくその内容を吟味する。

- (一) 所伝部別例
- (二) 所依正教例
- (三) 文義消釈例
- (四) 大章総別例
- (五) 心境釈義例
- (六) 解行相資例
- (七) 喩疑頭上例

(一)例において、「天台止観は漸次止観であるから、天台の三種止観とは別に、頓頓止観を立てようとする見解に対立して」(同上)五頁)、円頓止観こそ正説であることを主張する。(二)例は、『摩訶止観』所依の經典を論じたもので、これを『法華』『涅槃』の二經となして、その傍正を論ずるは、常途の説であるが、『涅槃』を扶律談常教とのみ見ないで、『法華』と齊等とみる、『涅槃經』重視のところに、湛然教学の特徴を見出さんとする。(三)の「文義消釈の例」は、『摩訶止観』の文章論の分析で、一般に分りやすい面があるので解説すると、まず(一)文義を詳究すること。(二)体勢を消釈すること。の二門を立て、「能詮の文(文章)と、所詮の義(意味)とを多角的に究明し、『摩訶止観』の体格氣勢を解釈しなければならぬ」とする。前者をさらに文章の義意と相状に分ち、後者を文章の体勢と義意の体勢に分ち、これら計四面について「各々一〇例ずつ都合四〇例に及ぶ解釈例を提示」するのである。

文学書の研究などでは、このように文章論や意味論からの分析手法が、まま用いられるのは見るが如くである。仏典研究のばあいはまことに珍らしい。著者が、「この文義消釈例に匹敵するような研究は、外には先ず探せないものであろう」というのも肯ける。案ずるに湛然は、四十二歳まで儒者であったという。するとこれは、中国文学との関連において論すべき問題でもあろうか。

ともあれ著者は、要領よく、且つ明快に、これら四〇例を整理し解説する。たとえば文章の義意をあかすための一〇例の(1)は、引証される経論について、その通・局を論じたもので、われわれが引用経論について絶えず悩まされている日常の問題でもある。「法華経」は一実相を示すのであるが、爾前の諸教を反省的に叙述するところでは、権方便の内容を説いているわけで、この点では『法華経』の文には、権・実両面の教説がみられる。「局って一実相を引証する場合は、実の文を引き、通じて方便を引証するときには、権の文(昔義)を引く」。このようなことが、最初から解っておれば、『摩訶止観』を読むとき、どれだけ利便であるか分らない。

以下、(2)類似の教を引いて観を証する(3)権の名を借りて、実の義を甲べる(4)喩を借り譬えを転ずる(5)旁証に引用して異議を弁ずる(6)総を開いて別を出す(7)宗要を引用する(8)儒家・道家の説を引用する(9)名を借り義を略する(10)準例して意を用いる、都合一〇例の場合を出して、ことこまかに内容を弁ずる。そのいくつかは、不識のうちには、われわれが解釈法として日常例用しているものもある。一〇例とは、いささか数を揃えすぎた観があるものの、きわめて組織的に方法論を組み上げているのがわかる。

しかし、われわれが最も必要なのは、次第に教相の心要に関係し

てくるつぎの、文相を詳究するための一〇例で、ここでは(1)相に随って開合する以下(2)処所に結示して本文の意を立てる(3)事・理・傍・正がある(4)文は偏でも意は円である(5)広略がある(6)文と行では同じでない(7)相待と絶待の前後(8)破と会の不同がある(9)解と行との不同がある(10)例を挙げて略することがある、等があかされる。

たとえば(1)は、一家立義の文相は、寛広で窮まることがない。三観・四教・四悉檀・五味・四諦・十二因縁・六度みなそうである。これは誰れしも覚えがあろう。そこで「事に随い、理に随い、法に随い、名に随い、行に随い、証に随い、自に随い、他に随い、通用しないものはない」「だから結撮して浮濫な理解に陥らないよう注意すべきである」云々。(3)について云えば「四種三昧は、正しく顕わすためであるが、旁らに兼ねて重罪を治する。十法界は、正しく理具を示すが、旁らに浅深を識らせる。識次位は、正しくは濫を簡ぶためであるが、旁らに諸経の行位を論ずる」。このように理・事・傍・正のあることを充分わきまえて文を釈せというわけである。(5)は、「五略の発心の中では、発心の類型を広説しているが、文相については簡略である。後の十乗の発菩提心では、文相は広説されているが、発心の類型については簡要である。修大行の中では事儀は広説するが、十法は略す。修正観の中では十法は広説するが、事儀は略す」。それは常に用いる『摩訶止観』解釈における、広・略の概念を適用する方式を示したもので、詳説するいとまのないのは残念である。

さいごに(6)にふれておくと、「十境・十乗の生起の次第や、十禅の浅深、豎の破法遍などのように、文章は次第しているが、修行は人に随うものであるから、必ずしも十禅は浅より深に階るといふこ

とはならない」と、文と行との不同をあかす。これなども教観双修をとく天台ならでの説であろう。

このようにひとつ一つ審細に見てゆくと興味はつきない。文の体勢を消釈する例（一〇）と、義の体勢を消釈する例（一〇）は、教相に関するさらに重要な解釈法であるが、割愛する以外にない。ただ大切なことは、これら四面の四〇例は、いづれも如上の分類原理にもとずき、概念規定を明確にして体系的に行われたものであり、この点正確に理解するには、かなり骨が折れよう。

いふなれば湛然は、このような体系的理解のもとに、『摩訶止観』を注釈し、かの『摩訶止観輔行伝弘決』を著したのである。

本書は、『止観義例』を刻明に分析して、『弘決』のタネ明かしをしたわけであるが、それが斯く簡単でないことは、見るが如くである。

以上は、計七例のうちの、一、二例を、それもほんのちょっと紹介したにすぎない。のこりは本書によって詳究して頂きたい。著者は、できうるかぎり丁寧に、かつ初心者にも解りやすく本文を和文に改め、懇切つとめている。これは実際ところみても、容易なことではないのである。

そこでは『摩訶止観』を読む際、当然おきるところの、重要な諸問題が提起され、その解決法が、一定の方向性のもとに体系的に示されている。

専攻以外の人が、『摩訶止観』をよむ場合は、多くの時間と労力をかけるわけにはゆかぬ。そこで『摩訶止観』を理解するための、一定の解釈法の基準が方法的に示されておれば、これ以上の利便はないのである。著者は、おそらく現在の時点で、これを企図され

ているのであろう。それがためには、湛然の時点で示された解釈法である『止観義例』を、まず、詳細に解明する必要がある。

このように『止観義例』は、刻明に分析されたが、それは、あくまで湛然における『摩訶止観』のよみ方であって、それがそのまま現在のニーズに応えるというわけにもゆかぬ。この辺のところを充分承知している著者は、第一章の注で、かなり丹念に『止観義例』の末疏を出して、『随釈』『纂要』から日本天台に及ぶ経緯を追尋している。

これら『止観義例』の解釈学の変遷をとおしてのみ、『摩訶止観』がどのように読まれたかの実態は明瞭になるのであり、延いては、現在の時点で、『摩訶止観』をどうよむかも、明らかになってくるのである。

基本から始めた研究は、息の長い仕事となるが、是非ともその完成を願うものである。

『正法眼蔵』に、『摩訶止観』をはじめ、『三大部』の引用があり、それも『弘決』や『釈籤』という湛然の注釈が用いられているのは、すでに明らかである。

しかし、道元禅師の当時、その主体をなす『摩訶止観』は、どのように読まれていたのか、その解釈法の基準を知らずして、いたずらに引用文を積み重ねても意味はない。

本書は、かかる意味で、曹洞宗学とも密接な関係を持つてくる。『眼蔵』でよく引かれている『弘決』なども、中国撰述であるから述門立ちとしてのみ取り扱うことができぬ事情が、当時の日本天台にあり、時代により思想背景によって微妙に理解の仕方がかわってくるのである。この点、宗学の方からの『摩訶止観』の取り扱い方

は、初歩的な教相の理解にすぎなく、且つ大雑把すぎる。道元禪師が、きわめて繊細な思想的センスで『摩訶止観』を用いているのに比しては、である。

本書のような、基本的理解を得るための書の出現は、その意味でも大いによろこびたい。

一言つけ加えておきたいことは、「解釈学」という用語である。この西洋哲学で用いられている学概念との関係を、やはりはっきりさせておくことが、読者には親切ではあるまいか。

さて、以上の如く説明された『止観義例』の解釈法を基準にして、『摩訶止観』を注釈した湛然が、「天台止観の優位性を自覚しつつ、『摩訶止観』の概要を著わした書物が『止観大意』一巻である」(同書一一頁)かくして著者は「私個人の好みの問題や、恣意の課題は一先ず棚上げにして、『止観大意』における湛然の解題法にそって、『摩訶止観』の構成ならびに内容について、その梗概を検討」する。これが第二章である。読者はそこで「天台止観の究明に並々ならぬ労力を費した湛然の解題法にこそ、他では類のない、要を得た学ぶべき綱要を」(同書一一七頁)を見出すことであろう。

したがって、第一章の、『止観義例』の解釈学が面倒と思われる方は、この第二章から読まれるとよい。第二章だけで『摩訶止観』の大意を、充分理会することも可能である。

初めに触れたごとく湛然は、止観の独自性を高調して、禅はむしろ斥ている。この点、なまじっか禅に好意的な立場がない、それだけ天台止観が際立って、却って止観の本質が明確に把えやすいのである。

さて「一 天台学の祖承・教観の大綱」「二 本文の綱要梗概」

『摩訶止観研究序説』(山内)

「三 結歎・勸修・謙己」の三段からなる『止観大意』が、原文にそいながら解説されてゆく。著者は、きわめて忠実に原文にそって湛然の真意を理解せんとつとめる。内容にふれる紙数がないので、第二節『止観大意』解題法の問題点について触れてみると、その第一は、おそらく禅宗の伝灯論を意識して出されたであろう天台の相承論の展開である。これは台禅交渉史のメインテーマであり、禅宗の最も関心をよせるところ、従来種々論ぜられてきたのは見るが如くである。第二は、『摩訶止観』を、「教観相資という天台学の基本的な枠組のなかで解説している点である」それは『止観義例』の「行解相資例」(第六章)「喩疑顕正例」(第七章)をふまえて、「もっと大きな枠組みのなかで、教観の相関を示そう」としたもので、「教における五重の玄義と十義の解釈法とが、観における五科の方便と十乗の観法とに対応している」(同上一九七頁)

云うまでもなく教と観との相関関係を、いかに無理なく説くかに、天台教学の生命がある。この点について著者は、如上の湛然の説相に深い洞察をこころみる。「この説き方は、五と十の数を相称させただけで、意味内容の上からは文面のような対称的脈絡は認められない。五重は経題釈の五重玄義のことであり、十義は、『摩訶止観』で起される教理の解釈法であるが、五科と十乗は、『摩訶止観』の主題である天台止観の方便と正行であるからである。したがって、『玄義』と『止観』の間にある教と観の関係を、『止観』に表わされた膚・肉・骨・髄を読みとるための解・行相資の軌範によって有機的に結ばうとした意図が現われている」(同書一九七―一九八頁)として十義を高く評価し、「天台止観をあくまで天台法華学との連関の上に理解」しようとする「湛然の卓抜な構想」を讃えている。

これなど第一章の湛然の解釈学をふまえた所産と見られるだけに、意味の深いものとなっている。第三は、『摩訶止観』の構成を、「前半の二巻と後半の八巻に大分し、前半は綱紀、後半は行相を示す」と解する仕方」を、「極めて隠当な説である」となす。これは、いわゆる五略・十広をもってする古来の章立てに対するもので、湛然は、こともなげに「調卷の上から、前二巻に説かれる第一大意章・五略と、三巻以後に説かれる第二積名章以下とを大分して綱紀と行相の二つに分け」（同書一九九頁）るのである。しかし、章立てや調卷上の分判は形式上の問題であり、重要ではあっても致命的な意味をもってはいない。これに比して第四の、正観の解釈についての湛然の問題点は、止観の本質に係わるものだけに後世大きな論議をよぶことになる。それは、十乗観法を釈して、「上根唯一法。中根二成七。下根方具十」といい、「上根一法」を強調する。これは「『止観大意』に始まる湛然の創説」とされるが、この点に関する湛然の偏向に注意を与えると共に著者は、『止観大意』の「概論書」としての性格から、その限界を指摘し、いささか舌足らずの観のある「上根一法」を救っている。湛然も思わぬところで、千年の知己を得た想いを抱くことであろう。先年、著者と共に天台山に遊んだ筆者は、六祖荊溪湛然の碑を、ともに拝しているだけに、一層この懐いが深い。しかし真意は、やはり著者のさいごに云う如く「これは恐らく上根一法を強調し、南宗禪に伍して天台止観が円頓の特性を具足したものであるということを強調した」（同書二一七頁）ものである。著者は、また十乗観法説述の広略にふれ、その欠点をも指摘して、過不足ない『止観大意』の評価をしている。あくまで湛然の時点での『摩訶止観』解釈ということ念頭におけば、この

ようなクールな目は必要であり、それが現時点での『摩訶止観』をどう読むかに連らなってくるわけである。

以上で、『義例』と『大意』の二書に依って、『摩訶止観』をどうよむかのメインテーマの解答はいちおう終った。第三章は、その上に立って天台止観の基本構造やその体系・方法を論じたもので、ついに坐禅儀との関係に及ぶ。これはこれとして、独立したテーマであり、稿をあらためて論及することにする。それに著者のいうごとくまだ序説の段階にあるので、今回は割愛することにした。ご諒承願いたい。しかし、序説とはいうものの、言及したい興味ある問題が多々存することを指摘しておく。というのは、筆者近刊予定の『禅と天台止観』に関連するもの多く、ぜひとも論及したいところであつたが如上の理由により筆を擱く次第である。

方法論だけを新しくしても、歴史への密着がないと、その成果は浮いてしまう。その点、オーソドックな手法を用いて、現代からの新鮮な解釈法を創出しようとする著者のところみは、本書において概ね成功したかにみえる。

（大東出版社、昭和六十一年三月三日発行、A5判、
本文、三四八頁、索引、一四頁、八、五〇〇円）